

Title	マンフレッド・フリードリッヒ著 若きマルクスにおける哲学と経済学
Sub Title	Philosophie und Ökonomie beim jungen Marx, von Manfred Friedrich
Author	金原, 実
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.305(97)- 312(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0097
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。近代労働運動史は産業革命と同時に始まる、といってもいい位である。このような資本主義の矛盾の展開点たる産業革命が、どうしてサン・シモンのバラ色の一般革命と同一のものでありえようか。著者はむしろ、産業革命の意味を技術革新だけに事実上限定し、その思想家をサン・シモンに擬した、といえるのではないだろうか。

つぎに、サン・シモンの社会主義的要因に関してであるが、「産業社会の完成」を「究極の目標」(六二頁)としていたはずのサン・シモンが、突然「サン・シモンの究極の目標は、貧しい生産大衆の境遇をすみやかに改善することにある」(二四五頁)というようになる。人も知るように、「新キリスト教」における、彼の「もともと貧しい階級」の生活改善への彼の熱意はきわめて強いものがあり、サン・シモンが労働者階級の代弁者として現れるのはここからだといふ、マルクスの資本論での叙述は有名である。われわれは、これを転換としてとらえるべきか、否か、まだ断言はできないが、著者はサン・シモンを産業主義として一貫して理解したため、これを転換としてとらえず、彼の社会主義的側面を少しく軽視する結果になったのではなからうか。それは時折行間に現れる。たとえば著者は、「もともと数多く、もともと貧しい階級」の生活改善を主張する彼の思想を「ペンサム流の主張」(二七二頁)と片づけている。だが、最大多数の最大幸福というペンサムの思想の本質は、フランス革命で宣言された自然権思想を解毒し、したがって、もともと貧しい人々の権利を武装解除し、階級的利害関係を抽象的な「多数」の

中に解消する所にあつたのであり、ペンサムの最大多数が、すぐに「もともと貧しい階級」と一致する訳ではないのである。

さらに著者は、「新キリスト教」で示された社会再組織の究極原理たる最大多数者の生活改善の原理を、「産業者階級が保持すべき社会的規範」(二七五頁)としている。なるほど、サン・シモンの究極目標を「産業社会の完成」におけば、新キリスト教の原理は、産業者が守るべき道徳・倫理ととれるのはたしかだが、「貧しい生産大衆」の境遇改善がその究極目標であり、産業社会はその具体的方策であるとすれば、新キリスト教の原理は、産業者に要請される道徳以上のものであろう。道徳としてなら、現代独占資本家でさえ、同様のことを口にすることができると。「新キリスト教」をよむ人は、それが、単なる道徳として以上に、社会組織の究極原理としてのべられてゐるのを見るであろう。

さてここで、この著の中でもっともすぐれた解釈をあげると、それは、サン・シモンの歴史観の分析であろう。彼の歴史観は、多少用語をかえれば、そのまま現代の唯物史観として通用するほど優秀なものをもっているが、なぜ、それが空想的な社会改革思想しか生まなかつたか、評者もかねて疑問に思っていたのであるが、著者の次の解釈をよめば、この疑問は大体解決するだろう。「要するにサン・シモンにとって、史実の研究は、進歩の法則と産業社会成立の必然性を確認するための手段でしかなかった。つまり、かれにとって、『経験は推理の助けになる』にすぎない」(二二三頁)。

最後に、サン・シモン派については多くをのべることができなく

なったが、それに対して「サン・シモン派の社会主義を、銀行家、企業者を中心とする、いわば産業者」「勤労者」の社会主義」(二三六頁)とする規定には、多くの問題があると思われることだけを指摘しておこう。

貴重な労作であるだけに、問題点を検討することに重点をおいたため、いきおい、批判の形になったことを著者に深くお詫びしなければならぬが、ともかく、これからサン・シモンを研究するものはすべて、この著作を通過してからでなければならぬことを強調したい。

(未来社・A5・二六〇頁・六五〇円)

マンフレッド・フリードリッヒ著

『若きマルクスにおける哲学と経済学』

(Manfred Friedrich, Philosophie und Ökonomie beim jungen Marx, SS. 202. Duncker & Humblot/Berlin, 1960)

金原実

(一)

最近、「初期マルクス研究」は、西ドイツでかなり活発におこなわれている。雑誌「マルクス主義研究」(Marxismusstudien, Schriften

d. Studiengemeinschaft d. Evangel. Akademien, 3. Bde. Tübingen 1954, 1957 u. 1960)の諸論文をはじめとして、H. ポピッツ(H. Popitz, Heinrich, Der entfremdete Mensch, Zeitkritik und Geschichtsphilosophie des jungen Marx, Basel 1953), E. テーバーン(E. Thier, Erisch, Das Menschenbild des jungen Marx, Göttingen 1957), G. ディッケ(G. Dicke, Gerd, Der Identitätsgedanke bei Feuerbach und Marx, Köln u. Opladen 1960)などをあげることが出来る。かれらの対象に対する関心のあり方やアプローチの仕方は、それぞれこととなっているが、かれらの「西歐的」な「初期マルクス解釈」の問題意識は、さかのほれば、J. プレンツ(P. Plenge, Johann, Marx und Hegel, Tübingen 1911), G. ルカーチ(Lukács, Georg, Geschichte und Klassenbewußtsein, Berlin 1923), K. R. ルンホ(K. Korsch, Karl, Marxismus und Philosophie, Leipzig 1923, 塚本三吉訳, 帝望閣, 大正十五年), K. ノーヴィツ(N. Löwith, Karl, Max Weber und Karl Marx, in: Arch. f. Sozialwiss. u. Sozialpol., Bd. 67, 1932, 柴田・鵬・安藤訳, 弘文堂, 昭和二十四年)などに発し、とりわけかれらが重視している『経済学・哲学手稿』解釈の原型は、H. ヲルクナー(H. Marcuse, Herbert, Neue Quellen zur Grundlegung des historischen Materialismus, Interpretation der neuveröffentlichten Manuskripte von Marx, in: Die Gesellschaft, Internat. Revue f. Soz. u. Politik, IX. Jg. 1932, Über die philosophischen Grundlagen des wirtschaftswissenschaftlichen Arbeitsbegriffs, in: Arch. f. Sozialwiss. u. Sozialpol., 69. Bd. 1933, 良知・池田訳, 未来社, 昭和三十六年)に見出される。

書評

ここに紹介するM・フリードリッヒの著書も、これらの傾向に属する最近の研究書の一つである。本書は、著書がフランクフルト大学経済・社会科学部 (Die Wirtschafts- und Sozialwissenschaftliche Fakultät der Universität Frankfurt/M.) に提出した学位論文をもとに書かれたものである。なお、本書は Frankfurter Wirtschafts- und Sozialwissenschaftliche Studien, Herausgegeben von der Wirtschafts- und Sozialwissenschaftlichen Fakultät der Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt/M. Heft. 8. として出版されている。私が本書をとりあげるのは、これによって最近の「西欧的」な初期マルクス解釈の一端を具体的に示そうと考えたからである。

著者は、序文において、今日ではマルクスの経済理論はその輝きを失ってしまったが、これに反して、初期の哲学的命題は、ますます焦眉の問題になっていると述べ、つぎのようにその問題意識を記している。

「もうはるか以前に一般に確認されていることではあるが、マルクス主義との批判的対決は『資本論』の経済学的予測や機械的唯物論の諸原理の月並で表面的な論駁をこえてで若きマルクスに独特な存在および歴史解釈にせまるべきのみはじめ、マルクスの構想を支える根拠に達しようのである。」(S. 9)

そして、従来の解釈では、「哲学の実現による哲学の止揚」という初期マルクスの中心的思想が充分にとりあげられておらず、かれの経済学批判の背後を支える「止揚された哲学」の認識意図が明確

にとらえられていないという。著者は、従来の解釈にしばしばみられるような態度——「初期マルクス」と「後期マルクス」とを機械的に対立させること——には反対し、むしろ一貫したものとして理解し、「初期」と「後期」とのいわば結び目を『ドイツ・イデオロギー』の史的唯物論のなかに求めている。したがって、従来の解釈がその中心においていた『経済学・哲学手稿』にかわって『ドイツ・イデオロギー』をその解釈の中心におこうとしている。そして、史的唯物論の若干の命題は、たしかに「形而上学的」なものではないが、その全体的観点は徹頭徹尾、思弁的な根拠によって支えられていることを論証しようとする。これが本書の意図である。

(一)

本書は、つぎのような四章から構成されている。

第一章、三月革命以前における哲学の危機

第二章、マルクスの青年ヘーゲル派との訣別

第三章、経済学批判への転換

第四章、史的唯物論の基礎づけ

叙述の方法は、原則として、年代的・生成史的分析の方法がとられており、問題が後期の著作との関連で論及されるかぎり体系的分析の方法があわせて用いられている。

第一章では、まず青年ヘーゲル派とフイエルバッハのヘーゲル批判が概観され、若きマルクスは、これら二つの立場——青年ヘーゲル派によって主張された「哲学の実現」とフイエルバッハの「非

哲学」(Nichtphilosophie)、「哲学の止揚」——を「哲学の実現はその止揚によってのみ、哲学の止揚はその実現によってのみ可能となる」という思想によって媒介した「ドイツ古典哲学のエピローグ」として把握される。つまり、青年ヘーゲル派の要求した「哲学の実現」は、社会主義社会の実現となり、フイエルバッハの「哲学の止揚」は革命的プロレタリアートによってはたされることになる。理論は、マルクスにあつては、プロレタリアートの革命実践のための衝動(Impuls)となる。マルクスのこの社会的実践の理論は、かれの経済学批判となって結実するのべられている。(S. 13-18)

つづいて、若きマルクスの出発点である『学位論文』をとりあげ、『学位論文』の解釈では、最近の研究が重視している「本文注解」と「準備ノート」を検討し、ここにすでに、若きマルクスの反体系的な哲学の否定をめざす意図が確認され、分析視点は、なお抽象的であるが、さきの「哲学の実現による哲学の止揚」という根本思想が、その出発点をもっていることが示される。そしてこのマルクスの分析視角は、ヘーゲルの『精神現象学』の「不幸なる意識」の発想と共通なものであることが指摘されている。(S. 37)そして、『学位論文』では、まだ「理論的精神」を「実践的エネルギー」となすものは「一つの心理的法則」にすぎず、哲学の実践は理論的性格をぬけていない点が強調されている。

第二章では、『ヘーゲル国法論批判』と『独仏年誌』の二論文が検討される。

『学位論文』の三年後、マルクスは『独仏年誌』に発表した『ヘー

ゲル法哲学批判序説』で、プロレタリアートの自己解放によって哲学の実現がはたされることを予告した。この『独仏年誌』は、四〇年代の哲学的急進主義の絶頂でありその転回点であった。ここではじめて、急進的運動の具体的な政治的プログラムが展開された。哲学と革命的プロレタリアートの同盟は、若きマルクスにとって、思想が「実践的行動の力」と結合する場所であった。ハイネの予言が、ここに実証される。

このような立場を考察するためには、まず『ヘーゲル国法論批判』が検討されなければならないと、著者はいう。なぜなら『国法論批判』において、はじめてヘーゲルの概念的展開に対する原理的批判がくわえられているからである。周知のごとく、マルクスの方法はフイエルバッハの「主語と述語の転倒」の立場であった。しかし著者は、ここで、フイエルバッハの影響は、内容的なものではなく、せいぜい方法的なものであったことを強調する。つまりマルクスはフイエルバッハからその方法的原理をうけついたので、それをこえて再びヘーゲルにたちかえっているというのである。(このような、フイエルバッハの影響を過小評価し、これに対してヘーゲルの影響を過大評価する解釈は、しばしば「西欧的」解釈に共通してみられる。(Vgl. J. Plenge, a.a.O., S. 16ff, E. Thier, a.a.O., S. 16ff, H. Popitz, a.a.O., S. 88ff) フイエルバッハはヘーゲルの概念的展開をかくされた神学として片づけてしまったが、マルクスにとっては、ヘーゲルの「欲望の体系」のなかにひそむヘーゲル弁証法の「合理的核心」を見出すことこそが問題であった。市民社会の自

己分裂はヘーゲルにあってはまだ、全体のなかの契機にすぎなかったが、マルクスは、それを自立化し、史的唯物論への道を歩んだのである。史的唯物論はまさに、ヘーゲルの絶対精神の哲学から生成したものであり、ヘーゲルが「欲望の体系」の特徴づけに使ったイギリス古典派経済学の無条件的な継承は、経済学批判へと発展したのである。(260)

この第一歩が『ヘーゲル国法論批判』でなされているのである。根本的な議論はさしあたりフォイエルバッハのそれと異なるものではない。ヘーゲルが対象に対してあたえた「論理的・形而上学的諸規定」は「現実的認識の仮象」にすぎず、特定の対象の特殊性をえがきだすことはできない。フォイエルバッハにとってヘーゲル哲学が神学の「最後の合理的支柱」であったように、マルクスにとっても、それは、「政治的神学」であった。(261) たとえば、ヘーゲルは市民社会と政治的国家との分裂・対立をえがいているが、他面では、この分裂を「理念の必然的契機」とみなして分裂している。両極を概念によって「媒介」しようとするのである。しかし、実在している両極を概念によって媒介し、解決することはマルクスにとっては、原理として不可能であった。それは対立そのものを原理とする世界が、それ自身の原理を展開することによってのみ可能である。そこから「固有な対象の固有な論理」が要求される。ここに明らかに、マルクスが哲学の批判から経済学批判へと歩み入る道が明らかとなる。もちろん「国法論批判」では、この点はまだプログラムとしてとどまっている。市民社会の具体的・経験的分析はなされ

ておらず、そこで展開されている歴史的事実は、ほとんどヘーゲルから引き出されている。そして、ヘーゲルのな立憲君主制国家に対して理想的な人間共同体——「デモクラシー」が抽象的に対置されているのみである。だが、ここで注意しなければならないのは、マルクスもまた先入的な抽象的論理的イデオロギーを社会現象のなかに、もちこんで解釈しているということである。それは、フォイエルバッハからうけつがれた、人間の「本質」とか、「国家の本質」とかの理念である。しかし、これは、マルクスがヘーゲルを非難した当の事柄なのではないか。マルクスがヘーゲルに反対しているすべてのことは、かれ自身の推論にもあてはまるのである。この点は、本書の最大の論点であり、更に次章で経済学批判との関連で検討される。

『国法論批判』の「デモクラシー」の思想は、『独仏年誌』の第一論文「ユダヤ人問題」のなかで展開されている「政治的解放」と「人間的解放」の区別の思想に直接つらなるものである。そこで展開されている真の自由は「政治的解放」ではなくて「人間的解放」によって生ずるといふ思想によって、ヘーゲルの「客観精神」の体系は重大な修正をうける。つまり、もはや国家ではなくて社会が「人倫の王国」を完成させるものとなる。第二論文「ヘーゲル法哲学批判序説」において「人間的解放」の実現の道が示される。しかし、この革命の社会的諸前提の二、三の見解を度外視すれば、新しい展開はない。とりわけ近代国家の社会的基礎——市民社会——の分析は見出されない。したがってつぎの事実が強調される。

『序説』におけるプロレタリアートの発見、プロレタリアートによる「全体的な革命」といふ思想、すなわちマルクスの「青年ヘーゲル派からプロレタリアートの革命的陣営への移行」は、最初はまったく歴史的・経験的分析から生れたものでなく、フォイエルバッハの宗教批判の命題の徹底化とヘーゲルの「客観的精神」の根本的な構造顛倒とから生じたものであり、経験的分析は、このあとから続いたという点である。(262)

したがって、マルクスの分析において、せいぜい、仮説的な前提としてもちこまれた「ドイツにおけるラディカルな革命の可能性」は、かれの手でただちに、おかしがたい確信となるのである。このように、マルクスが、議論を「アンチテーゼ的に」窮極にまですすめた真の動機は、ドイツ小市民の凡庸さに対するかれのプロテストであったと述べている。

第三章では、マルクスの経済学批判が最初に定式化されているとみなされる『経済学・哲学手稿』が検討される。まず「経済学批判の認識目的」が『独仏年誌』であたえられた構想の具体化(プロレタリアートを生み出す現実的物質的条件の解明)として把握される。著者によれば、そのための素材を提供したのが、古典派経済学であり、その概念的装置が、ドイツ古典哲学、とりわけ、ヘーゲルの『精神現象学』の諸概念であり、フォイエルバッハの宗教批判の命題であった。したがって、すでに方法において、根本的に古典派経済学とは相違している。

マルクスは、古典派経済学の科学的業績として「さまざまな相互

に疎遠な富の諸形態をそれらの内的統一に還元した」ことを認めながら、しかも経済的諸関係を「発生的に」展開せず、「あたえられた前提」のみを見出し、経済法則を「自然法則」の形態で叙述したことを批判する。(Theorien über den Mehrwert, Stuttgart 1919, III, S. 571f; Kapital I, S. 87; Kapital III, S. 884f.) たしかにマルクスは、『共産党宣言』や『ドイツ・イデオロギー』のなかで、人間や国家の「本質」についての抽象的弁舌を批判している。マルクスの認識した革命は「産業的定在」の運動をとおしてのみ具体化されるものであったからである。永遠に妥当する本質ではなく、「資本主義的生産の自然法則」を「歴史的・論理的具體物」として把握することが問題であった。しかし、ヘーゲルと同様に、マルクスも、現象と本質とを区別し、たんに現象する「外的な」形態と「内的な」形態とを区別することが必要であった。『資本論』において「もし事物の現象形態と本質とが直接に一致するならば、およそ科学は余計なものであろう」と述べ「資本の一般的で必然的な諸傾向はそれらの現象諸形態から区別されるべきである」と主張している。(Kapital, II, S. 870, I, S. 331.) このような「明白なために現象する運動を内的な現実的な運動に還元するマルクスの試み」は、かれがヘーゲルを非難していると同じことに帰着するのではないか。まさに剰余価値の利潤、利子、地代に対する関係は、ヘーゲルの理念が歴史や国家に対してもった関係と同じなのではないか。ブレンゲは、マルクス価値論のなかに、精神の自己発展に関するヘーゲルの教義の経済学的改作をみているのである。(Plange, a.a.O., S. 156) つぎつぎと

うならば、マルクスの経済学批判のなかに「形而上学的」な傾向が
つらぬいているというのである。著者は、この問題に対する全面的
な展開は『資本論』の方法と構成との詳細な分析が前提とされるか
らという理由で、全体にわたってはふれていない。しかし、マルク
スの経済学批判に滲透しているこの「形而上学的」根本傾向は『手
稿』から説明すべきであるという。なぜなら、この傾向は、『手稿』
においては、後の労作よりも、明らかに純粋な形であらわれている
から。つまり、『手稿』においては、端的にいつて「価値法則」の
分析はなされておらず、したがって、経済的諸関係は、その内的な
本質的な「基本形態」に還元されていないで、「人間の本質」とい
うような「形而上学的」なイデオロギーと対決させられているからであ
る。そして、『資本論』は、もはや『手稿』の方法をそのままうけつ
いでいるのではないが、明らかにその成果の上に築かれているので
あるという。というのは、『手稿』は、『資本論』において、現実的
運動が還元される本質的な形態として確立されているものを、すで
にあらかじめ規定しているからである。それは、『手稿』において
「労働する人間のプロレタリアートへの価値低下、かれの労働の他
の人間による獲得などが、経済関係の判断のための決定的視点とし
て規定されている」(S. 96) からにはほかならない。

著者は、この観点から、『手稿』におけるマルクスの方法がいかに
ヘーゲルの方法と類似しているかを、従来の研究、とりわけ、マ
ルクレーゼと、ルカーチの「若きヘーゲルの研究」を利用してあつづ
けている。『手稿』の「労働」、「外在化された労働」、「私有財産」

といった概念を分析し、『手稿』の分析視角の人間学的・存在論的
根本傾向が強調される。『資本論』の暗黙の前提となつてい
るもの——経済学批判の哲学的性格——が、『手稿』において明らかにあ
らわれていると結論する。この議論は、従来の研究が集中している
部門だけにかなり詳細におこなわれているが、とくに著者の新しい
視角は見られない。

第四章では「神聖家族」と『ドイツ・イデオロギー』がとりあげ
られる。

著者は、マルクスの思想の発展における『ドイツ・イデオロギー』
の意義をつぎの点にみとめている。『ドイツ・イデオロギー』におい
ては、『ヘーゲル法哲学批判序説』であたえられた構想——「プロレ
タリアートの全体的革命による哲学の止揚」という若きマルクスの
根本思想が、一個の包括的な歴史哲学である史的唯物論へと発展さ
れている点である。つまり、著者が初期マルクスの根本思想として
把握した「哲学の実現による哲学の止揚」というテーゼが、『ドイツ
イデオロギー』において徹底的に完成されているというのである。

それは、第一に、はじめはプロレタリアートにのみ関連していた革命
のテーゼが深化され、革命のおこなわれる社会の客観的諸条件の解
明をめざすより広汎な理論の基礎が確立されていること。第二に、
哲学批判が、意識形態一般の社会的基礎にむけられたイデオロギー
批判へと発展させられていることである。つまり、すべての意識形
態の生成と機能が説明される現実の土台は、物質的・社会的生産
のそのつどの発展段階であることが明らかにされているのである。

この立場から、マルクスは「神聖家族」では、ブルーノ・バウア
ーの「絶対的批判」を「非歴史的・思弁的歴史解釈」として批判し
『ドイツ・イデオロギー』では、シュテイルナーの「唯一者」を「ヘ
ーゲルの絶対精神の徹底的な俗化」「歴史の思弁的曲解」として批
判し、その社会的階級的基盤が、ドイツ小市民であると指摘したの
である。

だが、著者は、これまでのかれの議論からもうかがえるように、
マルクスの史的唯物論も結局は、ヘーゲルの歴史哲学の内容改作以
上のものをでないことを結論づけるのである。たしかに、マル
クスは、歴史の主体をヘーゲルとはちがって、歴史的に実在してい
るものにおいている。その意味で、史的唯物論を「歴史的内在発展
論」(Historischer Immanentismus)と呼んでいる。しかし、ヘーゲル
と同様に、人間の歴史の歩みをア・プリオリに決定しようとするた
めに、マルクスの唯物史観にあつては、プロレタリアートが、ヘー
ゲルの歴史哲学における「精神」と同様に、実体化されているとい
う。つまり、著者は、史的唯物論の「生産力と生産関係の弁証法」
を、絶えることなく展開していく一つの「永却回帰」の過程として
解釈し、そこからは、マルクスのいう「プロレタリアートの全体的
革命」は導き出すことはできないと考える。なぜなら、そのために
はプロレタリア革命に歴史の劇的な転回点としての特別な地位を仮
定しなければならぬからである。もちろん『ヘーゲル法哲学批判
序説』にくらべて、『神聖家族』や『ドイツ・イデオロギー』におい
ては、歴史的・具体的分析が豊富にされ、プロレタリア革命は、私

有財産の内在的運動の必然的な帰結として説明されている。だが、
このことは、唯物史観の命題によつては展開できず、明らかに経験
科学とは矛盾するという。したがって、マルクスの歴史哲学は歴史
的形而上学へ移行していることになる。ヘーゲルにあつては、歴史
は、その担い手を精神のうちにもつていたからこそ、歴史は理性的
な、内的意義のある過程として展開されたのであるが、マルクスに
あつては同じ役割がプロレタリアートによつてはたされているとい
う。したがって、マルクスの歴史哲学は、「以前の歴史の階級のうち
に、意識されない形態を、プロレタリアートのうちに意識された形
態を」もつ、統一的な「人類階級」(Menschheitsklasse)という「形而
上学的虚構」(S. 106) のうえに築かれている。そして、すべてのマ
ルクスの思想は、この形而上学的根本構造にたつたものである。た
とえば、マルクスは、古典経済学は、資本主義的生産関係の
歴史的性格を洞察しないで、それを「社会的生産の永遠の自然形
態」として実体化しているといつて批判する。しかし、なぜマルク
スだけが、はじめて、経済的関係の「物的外皮」のなかにその歴史
的核心を認識するという要求をかかげることができたのか。それ
は、マルクスが経済的関係を階級——その全生活状況がすでにこの
関係の「歴史的な否定」なのであるが——の見地から考察している
からである。

「カントは、歴史はいかにして、ア・プリオリに可能であるか」と
いう問題に、つぎのように答えている。すなわち「予言者が出来事
それ自身をかたちづくり、かつ、あらかじめ予告したことを企てる

場合にのみ可能である」と。マルクスにあつては、その未来を自分でかたちづくるところの予言者は、理論において自己意識にたつたプロレタリアートである。(S. 167)

(三)

以上によって、最近の傾向的な「西欧的」マルクス解釈が、どのようなものであるか、かなり明確にうかがえると思う。いま、ここで本書の基本的立場を全体的に検討することはできないが、最後に若干のコメントをつけ加えておこう。

本書は、初期マルクスの生成史的研究からみた場合、資料的には、ほとんど従来の研究を凌駕する点はないと思う。初期マルクスの生成史的研究の観点から問題となる点は、(一)、『国法論批判』におけるフイエールバッハの影響を過小評価する点、(これは逆にいえばヘーゲルの過大評価に関係する)、(二)、『ヘーゲル法哲学批判と平行

してマルクスがはじめていた、歴史研究をまったく評価していないこと。(三)とくに『独仏年誌』におけるフランス社会主義の結びつきを評価していないこと。(四)、『経済学批判』が、『手稿』段階に直接ひきもどされて解釈され、本来の経済学批判のもつ意義が把握されていないこと。(五)、『手稿』から『ドイツ・イデオロギー』への発展が具体的に明らかにされていないこと。などの諸点をあげることができると思う。これらの問題点は、根本的には、著者がヘーゲルマルクス関係のみを基本的な軸として考察し、マルクスの全体にわたってその「形而上学的」思弁哲学をみる立場に関連している。従来の研究が『手稿』に集中されているだけに、本書が『手稿』から『ドイツ・イデオロギー』へと研究をすすめている点は、これを評価したいが、著者が、以上のような立場を強調するために、とりわけ第四章の分析は十分内在的になされておらず、問題がのこされっていると考えられる。

新刊紹介

尾藤正英著

『日本封建思想史研究』

学界には時として無批判のままに不正確な知識や先入観が科学的なよそおいの下に通説となり、定説として市民権を獲得している場合が多い。これを批判し、それに対して新しい主張を展開することは、少くともその主張を裏付けるにたる十分な検討と、激しい情熱とを必要とするであろう。日本思想史とくに幕藩体制下の封建思想の研究においても、今日まで幾つかの定説が存在していた。わが国封建思想の思想構造とその性格規定、さらにその思想的根源を探ることは最も重要な課題の一つであつて、これはまずわが国封建思想と「朱子学」とを関連づけて把握することを中心として論ぜられて来た。とくに、封建的政治思想の解明において果された丸山眞男氏の主張は極めてユニークであり、すでに学界の一つの共有財産として、いわば定説となりつつあった。しかし今日では丸山氏の研

新刊紹介

究成果を各自の研究の出発点にすえながら、これを批判克服せんとする努力が思想史研究の分野で起りつつあり、すでにその研究を発表しつつある研究者が現れている。本書の著者尾藤正英氏もかかる研究者群の一人であつて、すぐれた問題視角と鋭敏なる思索と綿密なる検討の下に集められた本書はとくに注目

に値する。著者は過去の研究においてわが国封建思想を安易に「朱子学」と結びつけ、直結的把握に終っていることについての疑問を提起し、朱子学が社会的歴史的事情の異なる日本社会においてたどつて行つた運命を探り、それとの関連において日本における封建的思想のあり方、さらに封建制そのもののあり方を解明することを目標とした。(はしがき)著者はわが国封建思想を認識するために、江戸時代前期の数人の学者——閻斎と藤樹、さらに直方と蕃山——を対象として取上げ、過去の通説への批判を試みた。まず序において「近世儒学研究の課題」を論じ、本論第一部において、著者は「体制に対する擁護者的立場」として閻斎の思想を対象とし、閻斎学と朱子学との異質性を強調し、閻斎学のもつ社会的意義を検討し、それを成立させた「社会

的需要」を明白にせんとした。崎門学派は崎門三傑(直方、網斎、尚斎)を通じ展開したが、閻斎により破門をうけた直方の思想とくに注目し、そこに崎門学派の主流と目される思想構造を論じている。閻斎—直方の思想を検討することによって、全体としての崎門学派が如何に幕藩体制擁護的作用をなしたかを明白にし、思想構造として「朱子学」との相異性をとくに力点をおいて主張した。

第二部において著者は「体制に対する批判者の立場」に立つ学者として藤樹—その弟子の蕃山の思想を対象として論じている。藤樹の朱子学的思想の変質、思想形成の過程を、陽明学との関連において検討し、藤樹学と陽明学との類似と相違とを明白にせんとした。藤樹学に見られた体制批判者の見解の本質を探り、藤樹をしてかかる思想を懐かせるに至つた社会史的背景の検討に及ぶ。藤樹学は淵岡山と熊沢蕃山とにより二分されて行くが、著者は主として蕃山を対象とし、旧来の蕃山理解に批判を加えつつ、蕃山の歴史的評価を試みている。

紙面の関係で個々の内容を詳細に紹介検討することは出来ないが、氏のすぐれた洞察と非常なる努力とは日本封建思想史研究に対し